中日新聞（夕刊）

3 総合E版 2015年（平成27年）10月22日（木曜日）

関西発

iPS細胞移植1年

経過良好 新薬に弾み

体のさまざまな細胞になれる人工多能性幹細胞（iPS細胞）を使い、目の病気を治療する世界初の臨床研究は、移植から一年以上たった今もがん化が見られず、経過は良好と発表された。夢の医療に向けた第一歩に、関係者らは安堵や期待の声を寄せた。

今月二日に会見したのは、理化学研究所と先端医療センター病院（神戸市）のチーム。滲出型加齢黄斑変性の七十代の女性の皮膚からiPS細胞を作り、目の網膜色素上皮細胞のシートに変化させたものを、目の病巣部と置き換える形で昨年九月に移植手術した。一年たち、移植した細胞はしっかり生着していたほか、最も心配されていたがん化や拒絶反応が見られなかった。安全性を確かめるという一例目の手術の目標は、現時点では達成された形だ。

「人生で一番緊張した手術でした」と執刀医でセンター病院の栗本康夫・眼科統括部長。視力も維持されており「正直ホッとした。今後の追跡調査もしっかりしていきたい」。理研の高橋政代プロジェクトリーダーも「絶対失敗できないプロジェクトで、あらゆるリスクを排除した」と語り、「多くの患者さんに使ってもらえる標準治療を早くつくりたい」と意気込んだ。

iPS細胞技術を使った移植治療から1年たち、会見する高橋政代プロジェクトリーダー㊨と栗本康夫医師＝神戸市中央区で

「関西黄斑変性友の会」の代表世話人の高田忍さん（七四）は「患者にとって励みになる結果。時間はかかると思うが、早く実用化される日が来るのを待ち望んでいる。iPS細胞の技術を使った他の病気の治療が広がっていくことも期待しています」と声を弾ませた。

今後チームは京都大と協力し、患者本人の細胞でなく、移植時の拒絶反応が少ない特別な細胞を使った臨床研究も予定。iPS細胞の生みの親である山中伸弥・京大iPS細胞研究所長は「一年目での安全性が確認され、安心していきます。今後も最大限協力していきたい」とコメントした。

チームの開発した方法を発展させた新薬の販売を目指すベンチャー企業・ヘリオス（東京都）の鍵本忠尚社長も「一年間の安全性が確認され、さらに視力の悪化が抑えられているというデータが得られ、新薬の開発にも弾みがつく」と話している。

（芦原千晶）